



開校記念日 [7月8日]



宮城県村田高等学校

村田高校は、1924年(大正13)に町立の宮城県村田実科高等女学校としては開校しました。来年度で開校から100年となり、創立100周年記念式典をはじめとした事業が行われます。開校記念の日に、村田高校の歩みをたどり、本校で学ぶ意義を改めて考えることで、今後の高校生活や自らのライフプランを見据えよう。

【戦後の学制改革により、共学の(町立)宮城県村田高等学校となった開校日(1948.7.8)を開校記念日としています】

🏫 「宮城県村田実科高等女学校(町立)」の創立 [女学校設置の機運の高まり ← (第一次)大戦景気]

① 開校時のようす 📰 「入学生の募集に奔走中のところ漸く50名を突破する盛況」(河北新報より) 🧑🧒🧓

村田高校は、1924年(大正13)に村田実科高等女学校としては開校した。開校式及び入学式は、4月10日午前9時から挙行され、入学生は50名、修業年限は2年であった。履修教科は、修身・国語(講読・作文・習字)・数学・家事・裁縫・図画・唱歌・手芸・農業・体操の10教科で、家事・裁縫・手芸などの実科系の教科が重視されている。1925年(大正15)3月25日には、第1回卒業証書授与式が行われ、第1回生38名が社会へ送り出された。



② 戦時下の学校 🇯🇵 終戦の詔勅 動員先と東山開墾地で「玉音」放送を聞く

1932年(昭和8)、満州事変のニュース映画を見せ、陸軍記念日・海軍記念日には校長講話を行う。軍事講演会を生徒に聴講させ、これに教育勅語奉読式等が加わり、一層軍国色が強まっていく。1937年に日中戦争が起こると「応召兵歓送」「軍人家遺族慰問巡視」「武運長久祈願」「神社仏閣清掃」と言った行事が連日行われている。1943年からは、高等女学校規程により村田高等女学校となり教育課程も大きく変わり、国民科・理数科・家政科・体練科・芸能科・工作・外国語科に改編され、物象・生物・武道・教練・修練という科目も加わった。翌年、女学校の校舎も兵舎として徴用され、生徒たちは職員室を教室として使うようになった。6月には敵機からの攻撃に備え、校庭に防空壕を掘り、11月になると、勤労学徒として63名の生徒が仙台市原町の陸軍造幣廠に動員された。

🏫 「(町立)宮城県村田高等学校《共学》」として開校 [学制改革 ← 学校教育法(1947)]

① 定時制高校 [昼間部・夜間部] として開校 (1948.7.8) …… 毎年の蔵王登山・磐梯山登山 🧑🧒🧓

🏠 「以前は上級学校に進むには、大河原か、白石に行かなければならないので貧乏人には縁のないものであった。村高の開校は、動揺する心の底に何ものかを求めんとする向学の志ある者には、渴喉に水であった」(第1回生)

🏠 開校当初は、敗戦の混乱期で生活事情はよくなかった。冬は毎日のような停電で、生徒はローソク持参で授業を受けた。教室にはストーブもなく、火鉢が一つあるだけで、窓ガラスも破れていて、耐えられない程の寒さであった。

🏠 生徒の士気高揚のため、校歌(旧校歌)が制定されたのは1952.1.15のことで、講堂で歌唱指導があり、盛大に披露された。また、応援歌「栄光の歌」「村高の名の下に」「時は来たれり」が作られ、運動部の活躍もめざましくなった。

② 全日制課程の開設 [普通科・家政科] …… この頃の修学旅行は6泊7日で関西方面 🏫

📖 1953.3 生徒会誌『雑木』が創刊された。誌名は「幾度切られても屈せず」の伸びようとする強い意志、創刊号の表紙に掲げた北原白秋の詩から感受される素朴な美しさ、庶民的な親しみを象徴している

🏠 定時制は4年間であるが、昼間部は、3年間で必要な単位を履修してしまい、4年目はホームプロジェクトのみとなっていた。👉 「僕らは3年で卒業したいと痛切に感じ、生徒だけの全日制促進運動を開始した」(雑木3号より)

🏠 1963.9 村田町長より「全日制課程設置許可の申請書」が設置計画書一切を添えて宮城県教育委員会に提出される。👉 1964.4 全日制課程開校式が県・町の関係者列席のもと、講堂で盛大に挙行された。

🏫 県立移管1966 2学科 → 4学科 から 総合学科1993(6系列 → 4系列)へ 🏫

🏠 生徒・保護者、町当局、町民、職員の願いが実現し、1966.4.1 村田高校は、県立高校となった。同時に、新校章・新校歌が制定され、新たな歩み始める。一方で定時制課程は、1982年度で幕を閉じた。

🏠 1990.4.1 普通科・自動車科・電子機械科・生活科学科の4学科体制
🏠 企業ニーズ・地域の学校への要望
🏠 産業構造・社会の変化(第2次回石油危機以降)

🏠 1995.4.1 総合学科(6系列)開設
👉 4学科を発展させる形で統合し、総合学科に改編する
👉 4学科の総括と総合学科の検討

総合学科開設時
6系列(4クラス)
👉
社会情勢の変化
👉
4系列(3クラス)

国際教養系列:「普通科の文系」を想定した系列
自然環境系列:「普通科の理系」を想定した系列
社会福祉系列:介護福祉士及びホームヘルパー1級が取得できる系列
コンピュータ・ビジネス系列:「商業科」を想定した系列
メカニカル・テクノロジー系列:3級自動車整備士の取得を目標とする系列
メカトロニクス系列:電子機械科を前身とする系列

→ 言語・自然科学系列
→ 介護福祉系列
→ 商業実践系列
→ 機械・自動車系列



「ヨーソロー！」 (そのまま良い、行け！)



やればできる!!

普通科卒 談

学校での思い出は、何と言っても安住教頭先生に教えられた「英語の授業」です。先生の専門は化学でしたが、米国に留学していたとこのことで非常に堪能で、教頭になりたてで、バイタリティーと迫力満点の先生でした。最初の授業から「お前達、絶対英語を強くしてやる！」と脅しとも思える口調で言われた言葉が、今でも耳の奥に残っています。

1年の時は、中学校の復讐と小冊子に色々な熟語を使った例文200問を暗記させるという授業で、毎時間10問ずつテストを実施し、200問が終わると今度は和文を英文に直すという具合でした。テストにはペナルティーがあって、正解率80%以下を3回続けると女子はショートカット又は校庭を走らされ、男子は丸坊主にされるといふから、もう毎時間必死でした。英語の授業がある日は他の授業は関係なく、大半の生徒は内職(机の中に問題を隠して勉強する)をしていて、他の先生には全く迷惑な授業だったに違いありません。

先生は、私たちが卒業した半年後に他界されました。先生を恨んだり、憎んだりもしましたが、私たちに對する情熱、決して手抜きをしない指導、そして、私たちに「やればできる」ということを教えてくれた先生に今さらではありませんが、感謝いたします。

-ing/ta... -ing/ta...
like Gerund
run see
would like
continue



人生の縮図

普通科卒 談

高校時代は、柔道に明け暮れた。恩師加藤先生との出会いと中学校の仲間が村田高校に入り、柔道を続けるということだったので私も村田高校を選んだ。1年の時は、2・3年生の先輩方との上下関係等、高校には高校のしきたりがあった。先輩にはとても気を使ったし、中学校柔道とはまた違って、心・技・体をみっちり鍛えて頂いた。とても辛かったが、先生の指導のおかげで、2年の時には、県新人大会(会場:村田高校)団体戦で優勝することができた。3年の時は、県総体団体戦準優勝、個人戦中量級で優勝し、インターハイにも出場できた。

先生は教えの中に「柔道は人間として生きる基礎を養う人生の縮図だ」と口ぐせのようにおっしゃっていた。当時、何が何だか分からずに柔道に打ち込んでいたが、社会に出てこの意味が分かりつつある。柔道は奥が深い。①実社会において人間関係を円滑にできる(人に対する接し方、縦横のつながり)。②苦しい練習に耐え、自らそれをはね返し乗り越える力を養える(この力を練習で養っておけば社会においての様々な障壁を乗り越えることができる)。という実社会に飛びだしても即適応できるという教えである。人生80年、その内のたった3年間ではあるが、非常に意味のある高校生活だったと思う。



「我慢」について (内田より)

一月の第二日曜日、ラグビー大学選手権決勝の日である。ここ15年程、ウチダにとって最も大切な日となっており、一年がこの日を中心に回っている。毎年の国立競技場での歓喜が心の支えになっているのだ。

8年ほど前、故あって遠方にいる息子が成人式に出るために帰省することになった。以前、「成人式に出席する意味ある？」と聞かれ、「日本の成人式と言う通過儀礼の理解のためには、出席することは無駄にならないと思うが、単に友達に会うためであれば大した意味はないと思うよ」と成人式に出席していないウチダは答えていた。姉たちにも弟から相談があったら同様の答えをするように伝えていたのだが、年の近い姉(親の言うことを聞かない息子だが、この姉のいうことだけは聞く)が弟に「成人式はともかく、母さんが会いたがっているから、帰ってこなきゃだめ」と伝えたそう。まったく余計なことを言ったものである。本音を言えば多額の交通費をかけてまで、成人式に出る必要は全くなく、「帰ってこなくていい」と思っていたのに…。最終的に息子が成人式のために帰ってくると聞いた時、家人は大喜び、ウチダは「あ～あ交通費がもったいないな」と思っただけだったが…。ところがである。よく考えると名取市の成人式は一月の第二日曜日、ラグビー大学選手権決勝の日なのである。「オー・マイ・ガアッ! まずい!!」息子の成人式の日には父不在は許されるであろうか? 娘の振り袖でもなし、希望的観測により、父不在でも不都合はないと思ったが、さすがに、当日、突然いなくなっているというのはまずかろうと思ひ、家人に「成人式の日だけど、オレは特にすることないよね ♪」と聞いてみた。「どうして? ♥」と家人は表情を変えたが、「いや、着付けの送迎もないし、オレが成人式の日には家にいなくてもいいかのかなと思っ ♪」と踏み込んだ。すると「成人式の記念の日に親が家にいないとは、どういうことですか。仕事ですか? ♥」家人の表情はさらに怖くなった。「いや、毎年行っているラグビーの決勝と日にちが重なっているのだよ… ♪」とやや控えたのだが、「どこの世界に息子の成人式より、ラグビーの試合を優先する人がいるのですか!」と語気まで怖くなった。息子以上に、仕事以上に(いや仕事を頑張るためにも)、ラグビーの決勝の試合が大切な人が「ここにいるのだよ」と言いたかったが、そんなことは言えるはずもなく、あきらめるしかなかった。涙ぐみ、「一年、我慢するのだ!」と自分に言い聞かせたのであった。

生徒諸君、記念日は何より優先しなければならない。そのために、何かを犠牲にすることもあるだろう。そんな時は、ひたすら我慢するしかない。我慢がきく人ほど強くなれる。「我慢強さ」は人間の人間たる理性そのものである。我慢のきく人間は、たいいてい何とかなる。

